

地域に還元、 小水力発電所のポテンシャル

従来、土木施設は特定の目的で建設・運営されてきた。しかし、防災や観光、地域交流など多様に活用されている土木施設が目立つ。本企画では、このような土木施設の「だけじゃない」側面に目を向け、その多角的な視点を紹介する。第3回に当たる今回は、福井県大飯郡おおい町にある砂防堰堤で小水力発電事業を開始した、(同)おおい町地域電力の吉川守秋氏と萩原茂男氏にお話を伺い、防災だけではなく砂防堰堤の活用について紹介する。

(2023年4月18日(火) よざえもんCafeにて)

砂防堰堤×小水力発電

砂防堰堤は、山地や急斜面で地盤の崩壊により土石流が発生する可能性がある場所に設置される。河川において土石流の拡大防止や河床の急速な流出を防ぐといった役割を持ち、全国各地に配置されている。この砂防堰堤の「だけじゃない」機能として地域に貢献している小水力発電所を取り上げる。

南川みなみかわサイフォン式小水力発電所は、福井県のおおい町と小浜市に流れる二級河川の南川上流の南川第一号堰堤(写真1)で2021年から稼

働している。およそ200世帯分の電力を供給することができる。(同)おおい町地域電力はこの発電によって年間約2000万円の収入を得ており、この利益を基に、環境保護や地域振興に対する事業を行っている。

会社設立と理想 地域の自立へ向かうために

吉川守秋氏に、合同会社という形式を選んだ理由を伺った。吉川氏は生活協同組合に所属していたこともあり、最初は協同組合を設立して地域のための活動をしたと考えていたそうだ。しかし、設立当時の日本

では、法的な理由からエネルギー協同組合を作ることができなかった。そのため、運営方式を自由に決めることのできる合同会社として設立し、本来合同会社では必要のない総会を開き、話し合いで決議するような協同組合の形式に近い合同会社を設立することとなった。

萩原茂男氏はかつておおい町で造林業に従事していたが、日々の暮らしの中で、子どもが川や森、山を訪れる機会が少ないと気が付いた。そのため現在は、自然に親しみを持つ人を増やすことを目標にNPO法人森林楽校・森んこを運営している。この萩原氏の目標は、合同会社が、

「取材協力者」(所属は取材時のもの)
吉川 守秋氏
(同)おおい町地域電力代表社員、
NPO法人エコプランふくい理事
萩原 茂男氏
(同)おおい町地域電力業務執行社員、
NPO法人森林楽校・森んこ代表

南川に対する活動だけでなく、地域全体の環境保全のような多角的な活動を行っている理由の一つとなっている。

合同会社設立に際し、発電で得られた電力は地域の資源であり、地域のために使うべきであるという思いが吉川氏にはあった。発電所で得た利益を地元還元するために、運営も地域住民が行うことを目指している。しかし、住民が技術を自前で持ち、会社を設立し、運営していくことは困難だと考えられたため、外部の人間の助力を得て地域住民が自立していく方法を取った。合同会社設立のための出資金を集める際においても吉川氏は、地元住民からの金額的、人的な出資をできるだけ多くしてもらおうように働き掛けることで、地域住民主体の活動を目指した。他人ごとではなく、地域住民により関

心を持ってもらい、当事者意識をより高めてもらいたいという意図があった。

発電所と地域活動 川の魅力を発信する情報誌

合同会社が最初に行った企画は、この事業と南川について知ってもらうことを目的とした地域情報誌『い川』の発刊である。あらゆる人に手に取ってもらいやすい情報誌を目標に、役場をはじめとした公共施設や、南川流域にある商店やカフェなどに設置した。また、興味を持った地域住民から情報誌の郵送配布の要望も寄せられており、着実に配布数を増やしている。この企画は「こ



写真1 南川第一号堰堤

なる「JOURNAL」というグループが編集・発刊を行っており、萩原氏もグループの一員である。『い川』には研究レポートが掲載されており、地元にある大学の学生による成果を紹介する場にもなっている。さらに、Uターン・Iターンをはじめとした流域周辺に住んでいる人の自然に対する思いも掲載されている。『い川』は南川流域にゆかりのある人々の参加で成り立っていると見える。

各号では、それぞれ南川流域の魚・森林・動植物について触れられており、自然に対して親しみを持てるような内容ばかりであった。専門知識のない人も読みやすく、興味を創出させやすいつくりであると感じた。

持続可能な川と地域へ

発電所は完成から1年が経ったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でこれまで本格的な活動ができなかったことを考え、「ようやく軌道に乗り始めたがこれからが勝負である」と吉

川氏は語る。南川発電所には完成から20年先までの事業計画が作成されている。この発電事業が延長され、再生可能エネルギーの利用がより定着し、地域の電力源として貢献することが合同会社の目標だ。この実現には、取り組みを続けていく後継者の存在が必要不可欠となる。現在の運営メンバーは皆、兼業で参加しているため、専業で取り組むことのできる人を探している。

環境保全事業に向けた取り組みもこれから推進するという。例えば砂防堰堤の下床の泥への対処の研究である。この課題は、川だけではなく森林の整備も必要となっていくので、より広範囲・多様な研究・実験が必要となり、その実証には十数年という時間も視野に入れなければならない。川上のより良い環境づくりについても、川下住民も含めて、より多くの人々と話し合い課題を共有しながら時間をかけて行っていくと、吉川氏は語った。

取材を終えて

萩原氏は、山・森林を起点として

鹿による獣害問題やその利活用から地域における暮らしの豊かさを考え、吉川氏は、組合・発電という視点で、小水力発電より産出されるエネルギーを地産地消することからもたらされる地域全体の豊かさを考えていた。この二人の共通する地域という言葉の起点に、合同会社が始まり、地域が持つつながりを積極的に生かし、事業に取り組みまれていると感じた。

小水力発電所の砂防堰堤への併設は実績の少ない事例である。発電事業開始から1年と始まったばかりで、環境活動の知見も少なく取り組むべき課題も多いが、地域の生態系を含めて、自分たちの手でおおい町の未来を切り拓いていくんだという気概を感じずにはいられなかった。

この取材を通じて砂防堰堤を起点に持続可能な活動ができることを知った。砂防堰堤に小水力発電の要素を加えることで、利益を生み出し、自由度を広げる地域貢献性の高い構造物へ変化したのではないかと思う。

(学生編集委員・七里蒼、植野弘子、松永葵)